

イースター・復活日礼拝

2024年3月31日(日) 午前10時30分

司式 牧師 姜 徑米

奏楽 河野和雄

前 奏

招 詞 詩 編 68編20～21節

讃 詠 546

主の祈り

聖 書

エレミヤ書 49章12～13節 (旧1268)

ルカによる福音書24章13～35節(新160)

祈 禱

使徒信条

讃 美 歌 II 55

説 教「復活の主が分かる時」牧師 高橋和人

祈 禱

讃 美 歌 148

聖 餐 式

献 金

頌 栄 542

祝 禱

後 奏

起立が困難な時は着席のまま礼拝します。
礼拝は前の方から静かに着席しましょう。

3月の祈り

レント(受難節)の期間にあって、主の御受難の持つ恵みが意識され、罪の贖いと悔い改めの信仰の歩みが整えられるように。

イースターを覚え、復活の主を仰ぎ、礼拝と信仰の生活を確かなものにする事ができるように。

教会総会が主の御心に導かれるように。

高齢や体調などにより礼拝に集うことがかなわないでいる兄弟姉妹たちを覚えて。

震災の地の教会と人々を覚えて。戦争と紛争の地に平和がもたらされるように。

今日の祈り

主の復活の恵みによって、死にゆく罪人であるものが、信仰によって主の復活の命に与る幸いを覚え感謝して歩むことができるように。

復活の主が伴われる日々が力づけられるように。

教会の旧年度の恵みを感謝し、新年度の歩みが導かれ祝されるように。

新たな歩みに向かう人々が祝されるように。体調を心と体に弱さを負う人々に主が寄り添ってくださるように。

「復活の主が分かる時」 高橋和人

ルカによる福音書24章13～35節

イースターの喜びは信仰者の生涯を形作っている。主が寄り添い伴われる恵みだ。福音書は見事にそれを描き出す。これは、かつてのことではなく、今生きる信仰者の姿に重なる。

二人の弟子たちはエマオに向かう、エルサレムを離れ帰るところだ。期待は外れ、打ちひしがれている。喪失は大きい。重い十キロ強の道だ。彼らは話し論じ合う。意見が違っているのか。暗い顔で振り返り込んでいる。

そこに、主イエスが近づき「どんなことか」と問う。彼らは、ナザレのイエスについて人となり十字架のいきさつ、自分たちの期待を簡潔に語る。さらに十字架の死の三日目の今朝、墓に行った婦人たちが天使から聞いた「イエスは生きておられる」という証言を語る。

主は「物分りの悪いもの」と呼び、聖書全体から御自分を説明された。

彼らは共に歩き、弟子たちは主イエスを引き留め、食事の席に着く。主が祈りパンを裂いたときに二人の目が開け、そして、主は見えなくなった。

十二人ではない弟子たち、すべての信仰者にあてはまる。失意の内に暗い顔をして歩くものが、心が燃える経験をする。主が伴われるからだ。

エマオへの道程は信仰に生きる道筋である。人は主イエスに招かれ、弟子とされる。主に出会った者だ。しかし、「イエスは生きておられる」という肝心なところが明瞭でない。心が鈍く物分りが悪い。主は聖書全体を語る。それは神の民の歴史、人でいえば人生そのものだ。

主なる神がそこに居られ、語り掛け、裁き、慰めて回復を与え、御自分の許へと導かれる。そして、聖書全体が神の子、十字架と復活の主イエスを映し出す。二人はこの話が決定的なことに気づく。

二人は引き留め、家に入り食事を共にする。生活の場だ。そこで主イエスはパンを取り、讃美し祈りパンを裂かれた。聖餐に通ずる場面。そこで、彼らは目が開ける。復活の主との出会いは、追体験され共有され、私自身のものとなる。

わたしの生涯の重要なところ、まさに急所であるところ主イエスが臨んでくださる。今でも、目が開かれれば、主イエスだと分かり、心が熱くされる。それは、教会が今も主イエスの復活によって成り立ち、聖書全体を証することで、主イエスを語っていることでもたらされている。